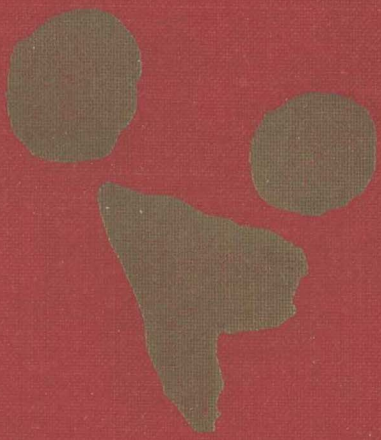

見るまえに跳べ

大江健三郎

新潮社版

見るまえに跳べ

昭和三十三年十月三十一日 発行
昭和四十七年二月二十九日 十八刷

定価 四五〇円

著者 大江健三郎

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社 新潮社
郵便番号 一六二
東京都新宿区矢来町七一
電話東京三268局一一一一(大代)
振替 東京八〇八番

乱丁、落丁のものは本社又はお買求めの書店にてお取替えいたします。

印刷・東洋印刷 製本・新宿加藤製本所
© Kenzaburō Ōe Printed in Japan 1958

目次

見るまえに跳べ　五
暗い川おもい櫂　七七
不意の唖　一〇五
喝采　一二七
戦いの今日　一七五
後記　二五一

装

幀

香

月

泰

男

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

見るまえに跳べ

見るまえに跳べ

冷たく湿っている石壁のあいだをぬけると、研究室の建物に囲まれた中庭に夜明けのような薄明りがみなぎっている。冬のあいだそれはずっとかわらない。そして春が来ると、中庭はたちまち祭のように花々と光にあふれ、高い木立の芽がひろがり硬い葉のむらがりになって空をますます狭く限るときまで、眼もくらむほど輝やきつづけるのだ。

しかしその年は春の到来が遅かったから、中庭を横切りながらぼくは、自分の外側と内側ともに、にがい静寂がしっかり腰をすえているのを感じていた。そしてそれは決して悪い感情ではなかった。ただそれは二十歳の学生にとってほんの少し明るさにかけ、ほんの少し若わかしくなかった、それだけにすぎなかった。

中庭のすみのバロック風の造りの石台から曇った空へむかってつき出ている蛇口が水に濡れた指のように柔らかく光っているのを横眼に見て、階段を数歩のぼってから、ぼくは喉が渇いていることに気づいて立ちどまった。冬のあいだずっとぼくは喉を渇かせていた。ぼくはひきかえした。

その蛇口からの水が不純な成分を含んでいて、飲むものの喉と胃をこわすということは大学

当局のくりかえす警告がぼくにおしえていた。しかし背を屈め唇をまるめて、ぼくは噴出する水を飲んだ。渇いた喉をほてらせながら忍耐するより、躰をこわすことは知ったうえで喉をうるおすほうが良い。これは無気力な傾向だな、とぼくはまずい水を口腔いっぱいにふくんで頭をあげ考えた。しかし、その一種の風潮は大学に威をふるっていて、ぼくのまわりにも危険をおかして渇きをいやしたあげく、声を嗄らせ、下痢に青ざめて元気のない学生たちはたくさんいた。結局、無関心ということなんだ、とぼくは唇のまわりをこぶしでぬぐいながら考えた。政治にも無関心、あとあとの病気にも無関心、恋人を見つけ出すことにも無関心、そして、とうめんの喉の渇きをたいせつにする青年たち。それは少なくともやっかいではないだろう。それらのものたちは友だちにあいそがよく、人をいやがらせない。じゃまにならない。

ところがおなじ大学に、無関心どころか眼をぎらぎらさせて他人と議論し政治に熱中し、明日のために体をきたえている青年たちもいるのだ。階段をのぼりきり、一年中昼のあいだも暗い廊下をぬけ、英文学の研究室のまえまで来ると、そのやりきれない青年たちが待ちうけて罠をはっていた。

かれらは光の入ってくるがわの窓に背をむけ、低い机をまえにして立っていた。かれらの机の上には署名用紙と闘争資金募集用の紙箱がおかれていることにきまっている。ぼくはおとなしく発育不良の子供がいじめっ子のまえを通りすぎるときのように、緊張し、頬や唇をなにげなさをよそおうためにことさらゆるめ、かれらと反対がわの壁のやや高めを見ながら歩いて行

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

った。かれらの一人がなにかいった。ぼくはすっかり自分の内部のざわめきに気をとられているふりをして歩きつづけようとした。

「署名に協力してください」と力をこめた声がぼくにおそいかかって、ぼくのあごをかれらへむけさせた。

「あとで」とぼくは眼をふせていった。

「署名に協力してください」と別の男が、ごういんにくりかえした。

ぼくは自分のおちつくことのできる、にがい静寂がみだされるのを感じた。

「おい」と最初の男がいった。「きみはフランス文学の学生だろう。とくに署名すべき立場じゃないか」

アジアの西の方とアフリカの片隅、と机のはり紙には書かれていた。そこで泥まみれの汚ならしい戦争がおこなわれている、実にながいあいだ、フランス人と土民との血が流され、まったくこんぐらかってしまっている。それはぼくにもよくわかっている。

「フランスの内閣へ抗議文をおくるんだ。あいつらの葡萄酒ぶとりした喉袋をしめつけて、ぎゅうぎゅういわせてやる。フランスの進歩的な学生と連絡をとることにしている」

「おれは止めとこう」とぼくがいった。

「おかしなことをいうなよ、インドネシアの戦争を平気なわけじゃないだろ?」

「おれには関係がない」

「きみはフランス文学をやっている」
「おれは十六世紀をやってるんだからな。植民地の問題は新しすぎる」
鉛筆を握り、腰を屈め、自分の名前を書いて硬貨を紙箱にいれさえすればいいのだった。しかしぼくは学生たちの言葉の押しつけてくる勢いにこだわっていた。
「きみは現在のフランスと植民地の関係をよく知らないんじゃないか」といちばん端に立っている三人目の学生がいった。
「おれが知ってるのは」とぼくはいった。「フランスがどんづまりへおちこんでしまっていて動きがとれないということなんだ。署名くらいでどうにかなる場合とちがう。追いつめられているんだからな」
「とにかく署名しろよ」とうすわらいをうかべて最初の学生がいった。「おれたちだって、そういうことなら耳にたこができるほど聞いてるよ」
「おれはしないよ」とぼくはむっとしていった。
三人目の学生がぼくのまえに立ちふさがった。かれは興奮して瞼をひくひくさせているのだ。
「きみの態度はおかしくないか?」とかれは怒りにふるえる声でいった。「ぼくたちをばかにしていないか」
「はっきりしているのは、おれがむやみに署名したり抗議したりしたくないということなんだ」

とぼくはいった。

「署名しろ、ぼくは力ずくでもきみに署名させる」

ぼくはかれの腕がからみついてくるのから自分の右腕をふりほどこうとして体をよろめかせた。そのはずみにぼくの右手の甲がかれの頬にあたって小さな音をたてた。かれは逆上してぼくに殴りかかり、それを防ぐためにぼくが闘った。たちまちぼくらは引きわけられたが、ぼくの右の鼻孔からは血が噴きでていた。いくつかの研究室のドアが開き、助手をふくめて多くの学生たちがぼくらを眺めた。ぼくは指で鼻孔を押えながら廊下を駈け、角をまがりフランス文学の研究室へ入って行った。

「まあ、まあ、たいへんなかっこうで」とまじめなときでも笑っているようにしか見えない短かい顔をした女の助手がぼくを批評的に見すえていった。「いったい、どうしたのよ」

「紙をくれないか、つまんないことさ」とぼくはあおむいたまま椅子にかけながらいった。

助手の皮膚のにおいがほんのわずかする紙で唇とあごの血をぬぐい、汚れた指をふきとってからぼくは助手と見つめあって苦笑した。助手はぼくの手からまるめた紙をうけとりいそいそと紙くず入れへ棄てに行った。

「あなたの鼻がみるみる腫れてくるわ」と彼女はいった。「人間の鼻が腫れるとこ初めて見た」

ぼくには彼女がほんとうに驚いているのかどうかわからなかったので、あいまいにうなずきかえした。ぼくのまわりに、再び日常的なにがい静寂が回復しはじめていた。

「ほんとに、どうしたのよ」
「殴りあいさ、鶏のような殴りあい」
「勇ましいわね」とむしろ憤然として助手はいった。その言葉は一種の流行だった。ぼくらの大学の学生はみんな《勇ましさ》から遮断されていたので、ぼくらはみんなその言葉を歌のようにたびたび口にのぼせていた。
「勇ましいより、いやらしい」
「誰と、また?」と少し本気になって助手が訊ねた。
「あんたの手鏡をかしてくれないか」とぼくは助手が根ほりはほり質問しはじめるのを警戒して機先を制した。
「なんだか、ばかなことをするわね。おとなげもない」と彼女は自分の机まで手鏡を取りに戻りながらいった。
「われながら、おとなげもない」
ぼくはこまかい化粧品の粉末のこびりついているまるい鏡のなかに、自分の血色の悪い痩せた顔、その腫れてきている鼻と唇の隅のかたまって黒褐色にかわった血の玉の付着している小さい裂けめ、それに充血している右眼とをねんいりに点検した。
「あいつ、すばしこいやつだったな」とぼくは感心していった。「短かいあいだに、いろんなとこひっぱたきやがった」

「ほんとに喧嘩したの？」とすっかり本気になって助手がいった。
「お祭さわぎの大乱闘」
「ほんとにばかなことをするわね」と助手が意地の悪い、そして思いがけなく欲望にかわいている小さな眼でぼくの腫れた鼻と切れた唇を見つめながらいった。「唇からはまた血がでてきたわ、そんなのなめるとなおるのよ」
ぼくは舌をのぞかせてなめた。二年まえ、ぼくは基地拡張を反対する闘争に加わって雨に濡れた髪から滴る雨水が眼や唇をつたい、あごを流れえりくびに流れこんで下着を濡らすのを疲れきり寒さに身ぶるいしながら耐えていたものだった。そして汚ならしい喉の皮膚に剃刀傷のある勤人と腕をくみ、ぬかるみに立って歌い、頭をがんがんさせた。しかし警官に殴りつけられて列からはじきだされる時、ぼくの体は怒りから針を刺された貝の肉のようにごういんに縮みあがり、切れた歯茎からの血の味が口腔いっぱいにひろがって、ぼくにおちついたかいがいしい感情を回復させたものだった。そしてあの時、血の味には小市民的な、けなげな感じがあった。いま、それはそうでない。
「陶酔してなめているのね、恋人のことを思いだしてるんでしょう」
ぼくはひどくびっくりして、助手の光を背にしてかげった顔を見あげた。それは迫って来て自分の舌を桃色につやつやさせ、ぼくの傷をなめたがっていた。ぼくは頭をふり、教室へ出かける学生たちの後をおうために立ちあがった。助手はとくに意味のない溜息をもらしていた。

教室でぼくはかたちの良い体と美しい白髪の教授から古いフランス語の授業をうけた。それはいつものとおり感動的で、胸をしめつけた。ぼくはあまり勉強をしなかったので、教室では短かいあいだ唖になるほど恥じていた。そのせいで、授業が終るとぼくは腫れた鼻をからかう同級生たちを相手にせず、むやみに昂然と肩をそびやかして階段を駈けおりた。英国風の鉄門の向う、通行人の靴で傷ついた煉瓦道に、灰褐色の車をとめて良重とせんさいな眼をした大男のガブリエルがぼくを待っていた。

ぼくはあいまいな微笑をうかべながらかれらの車へ近づいて行った。鼻がすっかり歪んでしまうほど腫れたので微笑がうまく行かなかった。ガブリエルが運転席から体をのばして後部座席のドアを開いた。かれはそこへ入りこむぼくの横顔をみつめてひやかしの口笛をならした。良重がガブリエルの脇からいったん車を降り、ぼくのそばへよりそいに来た。

「どうしたのよ」と良重は不機嫌にいった。「すっかり腫れてるわ」

「ああ」とぼくは良重の肉の厚いふかぶかした掌に顔をはさまれていった。

「痛む?」と良重がいった。

「すごく痛むさ」

「熱を持ってるわ」と良重はぼくの腫れた鼻へ唇をふれてみていった。「冷やさなきゃたいへんよ」

ガブリエルは左腕をハンドルへかけ、シートの上へ体をのりだしてぼくらを見つめていた。

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com